

図書館だより

都城工業
高等専門学校
図書館

No.84

FEBRUARY 2019

特集

- 校内読書感想文コンクール
入賞者発表
- 深山書評受賞者発表



独立行政法人国立高等専門学校機構
都城工業高等専門学校
National Institute of Technology Miyakonjo College

表紙(イラスト)：小楠梨菜(4A)

宮崎の詩人	図書館長 笹谷浩一郎	・・・1
図書館で「温故知新！」	機械工学科 山中 昇	・・・2
大切な無駄	機械工学科 増井 創一	・・・4
毎日1ページの読書	一般科目 森 寛	・・・6

特集

校内読書感想文コンクール入賞者発表

校内読書感想文コンクール入賞作品	・・・8
------------------	------

今年度の活動と来年度の図書委員会について

学生図書委員長 物質工学科 福島 聖	・・・20
副委員長 電気情報工学科 田中 恒成	

第六回「深山書評」入賞者発表(入賞作品)	・・・21
----------------------	-------

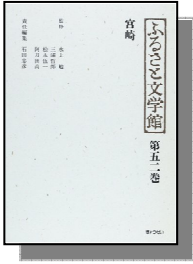
図書館からのお知らせ	・・・26
------------	-------

図書館開館予定について

学年末・春季休業期間中の長期貸出について

編集後記

宮崎の詩人



『ふるさと文学館 (52) 宮崎』

石田忠彦編 (ぎょうせい)

請求記号: 918.6/744/52

配架場所: 専門・教養

図書館長 笹谷 浩一郎

私はかつて、ある文学研究者の手伝いで、宮崎県を舞台にした文学作品、文学者について調査、資料集めをしたことがあります。各地の図書館で作品を探したり、文学関係の新聞、雑誌の記事を集めたりしました。当時、宮崎の文学者といえば、歌人の若山牧水くらいしか知らなかったのですが、この調査を通じて、全国的にはその名を知られていなくても、素晴らしい文学者が宮崎にも数多くいたことを知ることができました。特筆すべきは、宮崎には個性豊かな詩人が多いということで、それぞれの場で詩的コミュニティをつくり、己の詩作と後進の指導にあたってきたようです。今回は、郷土出身の詩人を数名紹介したいと思います。

現在の串間市出身の詩人に神部雄一（かんべゆういち）がいます。彼は明治35年に生まれ、旧制志布志中学から東洋大学に進学し、関東大震災が起こった年に当事流行していたダダイズムやアナーキズムに刺激を受け、文学にのめりこんでいきます。第二次世界大戦の戦況が激しくなると、日向日日新聞（現在の宮崎日日新聞）の招きに応じて帰郷し、文化部長、出版局長をつとめながら、同人誌「竜舌蘭（りゅうぜつらん）」の同人として作品を発表し続けました。彼の代表作「鶴」を紹介します。

**鶴は飛ぶ 青い海洋の上を すずぽけた
蝙蝠傘のように 悲しく鳴きながら
長いあいだ
ほしいままにしていた虚名が
影となってすべり落ち
海洋の皺の上に 黒く写っている**

都城出身の詩人に富松良夫（とみまつよしお）がいます。都城市内の小中学校の校歌の歌詞を数多く作詞しているので、知っている人も多いかもしれません。明治36年生まれの際は、その生涯のほとんどを難病との闘いに費やすこととなります。文学の風土とは程遠い、旧薩摩藩の気風が強く残る都城で、文芸誌「盆地」の同人となりますが、創刊号は都城高等女学校（都城泉ヶ丘高校の前身）の女学生に雑誌を売ることで印刷費をまかなう等の苦労があったようです。敬虔なクリスチャンでもあった彼の作品には清冽な美しさの中にも、内に秘めた激しさを感じさせるものが多いようです。

県北の延岡出身の詩人に渡辺修三（わたなべしゅうぞう）がいます。彼は大学卒業後、東京で佐藤惣之助主宰の「詩之家」の同人となります。（ちなみに、佐藤惣之助はプロ野球阪神タイガースの応援歌「六甲おろし」の作詞家としても有名です）。その後、家庭の事情で郷里の延岡に戻り、祝子川の清流沿いの山腹の一軒家で詩作を続けました。後に彼を慕って、多くの若い才能ある詩人たちが集う様になり、その中から、詩の芥川賞と呼ばれるH氏賞を受賞する杉谷昭人、本多寿といった優れた詩人を輩出することになります。私は実際にその山腹の家を見せて頂きましたが、当時の若い詩人たちに思いを馳せる幸せな時間を持つことができました。

宮崎市生まれの詩人の一人に山中卓郎（やまなかたくろう）がいます。彼は故郷での恋愛関係のトラブルから逃れるように故郷を捨て、東京に出て貿易会社で働きながら詩作を続けました。その後帰郷して、同人誌「竜舌蘭」の創刊に関わります。彼は若くしてこの世を去り、作品集も詩集「坂の上」一冊だけですが、そのなかで、私が大好きになった「水平飛行」という作品を紹介します。

ぼくは借りもの そこぬけひろい花道を
ぶらさがって通るだけ
鏡が怖いんだ 飛び越すたびに
太陽の破片がぼくを狙う
ちらばって たえず照準をあわせている
ぼくは酩酊する
時間の吸盤からすべり落ちる
肘の下で 気やすく女を想うな
さつきから ぼくの軀はきしみどおし
持主のいない空の上 雲がひろがる
借りものの目がかすむ
贗せものの耳が鳴る
やがて ゆれる干潟も近づいてくる

この他にも、皆さんに紹介したい素晴らしい詩人がたくさんいるのですが、それはまた別の機会に取っておくことにします。なお、宮崎の文学者の作品、宮崎を舞台にした作品をまとめたものに、「ふるさと文学館第五二巻宮崎」（ぎょうせい）があります。本校図書館にも配架されていますので、紹介しておきます。

図書館で「温故知新！」



『企業のためのやさしくわかる
「生物多様性」』
枝廣淳子，小田理一郎著
(技術評論社)
請求記号：519.13/エガ*

機械工学科 山中 昇

はじめに、人の何かが終わる節目にはその来し方を思うものです。私事で恐縮ですが、都城高専に赴任してこの3月で34年になります。早いもので定年退職の年になりました。本校に赴任する前は日本国鉄（通称：国鉄、JNR）の工場に技術者として4年間勤務しました。国鉄を退職する時は工場の退職者70数名いる中で私一人が二十代で、他の方々は定年退職者でした。その当時は国鉄が民営化されると思いもしなかったのですが、その2年後には現在のJRになりました。

さて、定年を迎えるに当たってこれまでの来し方を振り返ることが多くなりました。学生時代には、九州内の大学の学生達が社会問題を勉強して活動する団体（確か、九学連とっていたと記憶していま

す。）で、三池炭坑や水俣病などの勉強会や運動に参加したり、他の活動もしていました。このようなことはもう社会問題として表に出て来ることはほとんど無くなりましたね。そして、青年海外協力隊に参加しようとしたこともありましたが、資格がなく参加できないままでした。しかし、この夢は今年の4月からシニア海外ボランティア（SV）として実現できそうです。SVの応募は大学院を修了し国鉄に入った年に受けた英検の資格があつてすんなり進みました。何かの目的があつて受けた訳でもないのに役立つことがあるのですね。因みに英検の受験会場は本校でした。その時から都城高専には縁があつたのですね。

本に関わることを書きましょう。私の学生時代の社会的な課題は、資源とりわけエネルギーの枯渇でした。このような背景もあり効率の良い国鉄に入社したのです。さて、学生時代に古本屋でロシア人の書いたレーザの本を偶然見つけ夢中で読みました。そ

の本を読みながら、レーザを使って不足しているエネルギーを地球外から地球へ輸送できるのではと考えた時もありました。しかし、さらに考えを進める内に地球のエネルギーバランスを考えた時、今の地球が最も動物にとって生きやすいのなら地球外からエネルギーを供給することはそのバランスを崩すことにつながると考えてそれでもうやめました。このことに関連するかもしれませんが、今後ますます地球のことを考えた多様性（ダイバーシティ）を考えて発展することが大切になるかもしれません。その後、その本のことは忘れていました。そして、高専の教員になった時、加工法の授業でその時に勉強したレーザのことが役に立つことになったので、印象に残っています。その本にはレーザの原理などが詳しく書いてありましたが、今では普通に使っている半導体レーザのことについては、当然書いてありませんでした。

さて、本年度で退職するに当たり、これまで研究してきたテーマにも終止符を打たなければならなくなりました。そのテーマは圧延という方法を応用した加工法です。圧延は回転しているロールという2本の円柱の間に金属材料を通して板や鉄道のレールなどを作製する方法で教科書にも載っている方法ですし、機械工学科の学生さん達のご存じの方法です。ところで、研究を進めるに当たりその現象が複雑で解決の糸口を見つけるのが中々難しく思えました。このような複雑な事象から統一した法則を見いだす方法で思いつくのが、皆さんもご存知のAIとかディープラーニングではないでしょうか。この方法はちょっと難しそうと思いつながら他に何かないかと考えていてふと思いついたのが「逆問題」という言葉です。学生の皆さんが授業などでやっている入力（実験条件など）から出力（結果など）を求めるやり方を順問題（Direct problem）といいます。その逆に出力から入力を推定するやり方や入出力の関係性を推定するやり方を指して逆問題（Inverse problem）といいます。学生の皆さんにはなじみがないかもしれませんが、数学や物理学の一分野です。そして、

研究を進めていくと逆問題がAIやディープラーニングなどに関係していることが分かり、しかも、研究の解決の糸口になりそうな本が図書館にあるではないですか！もう少し時間があれば、これらの本を利用して具体的にディープラーニングのプログラムを作成して現状よりもっと正確な結果を導き出せるかもしれません。面白そうです。文末に参考にした本を書きます。興味のある方は読んでみて下さい。

ところで、高専在職中の思い出話の一つ。本校赴任前は、小説もよく読んでいました。趣味の一つが山登りなので、学生時代には新田次郎氏の山岳小説はほぼ読み終えていました。さて、なぜこのことを書いたかという新田氏の小説の中に、「アルプスの谷 アルプスの村」という小説があります。私の若い頃のことです。スイスで学会が開かれることになり、学会参加とヨーロッパの都市の視察のために都城市から補助を受けてヨーロッパに行くことになりました。そこで、学会の用事を終えたらスイスの町の視察をする計画を立てました。しかし、その時ヨーロッパは初めてでスイスの町のどこを視察すれば良いかも分からなかったので、「アルプスの谷 アルプスの村」を参考にして廻ることにしました。本に出てきた登山基地のツェルマット、グリンデルワルドを基点にしました。その時眺めたユングフラウヨッホ、モンブラン、マッターホルン、アイガーなどの山々を思い出します。そして、その時小説のシーンが目に浮かび感激したのを思い出します。私にとって随分昔のことですが、皆さんにもこんな小説とのつながりが出てくるかもしれません。いろいろな本に出会えるのも図書館の魅力ではないでしょうか？新田次郎氏の本も多数あるようですから、興味の湧いた人は読んで下さい。

さて、タイトルをなぜ『図書館で「温故知新！」』としたのでしょうか。皆さんは図書館の本は、古い情報あるいは古くさい本が多いと思っているかもしれませんが。勿論比較的新しい本もあります。何より現在の技術の多く（いえ、ほとんど）が既存の技術の組合せが基となっていると何かの本で見た記憶があ

ります。ですから、図書館で手に取った本の中に書いてある技術が、皆さんが未来の新しい技術を生み出すためのきっかけになるかもしれません。例えば、上述の圧延研究のように。本について書いた上記のエピソードは、図書館をおおいに利用して皆さんの技術の温故知新を深めてくれることを期待して書きました。皆さんの行く先は前途洋々としています。

そして、本校での様々な経験が行く先を照らしてくれるものと思います。最後に在校生の皆さん、卒業生の皆さん、長い間お世話になり、有難うございました。4月から夢と希望を胸にSVで頑張ります。皆さんも夢と希望に向かって明るく元気に頑張ってください。

それでは、さようなら。

【山中先生推薦図書】

- ・枝廣淳子、小田理一郎著:企業のためのやさしくわかる「生物多様性」、技術評論社、2009
- ・金丸隆志:カラー図解 Raspberry Pi ではじめる機械学習(基礎からディープラーニングまで)、講談社、2018
- ・小高知宏:機械学習(マシンラーニング)と深層学習(ディープラーニング):C言語によるシミュレーション、オーム社、2016
- ・上村豊:逆問題の考え方(結果から原因を探る数学)、講談社、2014
- ・日本機械学会編:逆問題のコンピュータアナリシス、コロナ社、1991
- ・『八甲田山死の彷徨:アラスカ物語』新潮社、1979.1. - (新潮現代文学:44)
- ・『孤高の人』孤高の人:新潮文庫 / 新田次郎著
- ・『強力伝』栄光の岩壁 などなど

大切な無駄



この学校は、学生として過ごした場所でもあり、初めて社会人として過ごした場所でもあり、5年という短い期間で離れることになったことは寂しく思います。この場を借りて、本を読む等ことについて、私なりの考え方をお話させていただきます。

私はどちらかというと本をあまり読まない人間だと思います。私の中では、本を読む=勉強する。と

機械工学科 増井 創一

いう形になることが多く、それ以外に本を読むことをした記憶が余りありません。学生のころは、特に頭著だったと思います。別に活字が嫌いとかではなく、時事問題には興味があり新聞などは積極的に見えていて、学校の図書館になる新聞コーナーはよく利用していました。ではなぜ本を読まなかったかという。大きな要因はインターネットの普及にあります。今でこそ常時接続やどこでもできることが当たり前となりましたが、私が高専に入る前ぐらいまではインターネットといえばパソコンでするものであり、つなぐ時間に応じて料金が必要になるなど今では考えられないようなものでした。それが高専に入った頃にインターネットができる携帯電話が発売さ

れ、いつの間にか定額でインターネットができるような時代になりました。幼い頃からパソコンに触れてきた私にとってそれは革命的なことで、私が当時欲していた活字はインターネットにあり、それを読み漁るのに必死で本に付き合っている暇が無いというぐらいパソコンを使ったインターネットに多くの時間を費やしたと記憶しています。そのため前述の通り私が本を読む機会というのはその殆どが勉強の時だけであり、高専時代に自ら進んで読んだ本はほぼないと言っていると思います。

そんな私が本を読むきっかけとなったのは大学へ進学し研究を行うようになってからです。研究は新しい試みであることが重要であり、そのためには論文や様々な書籍を読むことでまずは既存の技術などについて学ばなければなりません。この時点では何が必要なことなのかははっきりしないことが多く、手当たり次第論文や書籍を読んでいました。言い方が悪いかもしれませんが、本を読むということは無駄な知識を多く取り入れる方法だと思っています。知識を多く蓄えるということは様々な視点で物事を判断する上では重要な役割を果たします。本を読む場合、必ず自分が欲する情報以外も目を通す必要があります。場合によっては欲する情報の何倍もの無駄な情報が書かれている書籍もあります。それに対してインターネットでは検索フォームに単語を入力して記事をすぐ探し出すことができます。この検索エンジンというツールが普及したことにより世の中はかなり便利

になったと思うと同時に、検索した単語に関係のある記事しか表示してくれないというところに大きな問題があると私は感じています。検索結果として出される記事は入力された単語やこれまで閲覧したサイト情報などを加味した上で最適なものが表示されます。この判断をしているのはコンピュータであり、寄り道をすることなく欲する答えを常に導いてくれることでしょう。しかしながら、検索で得られた情報だけで人間が物事を判断するようになるなら、それはコンピュータが考える範囲でしか考えていないことになります。これからはAIが発達してますますその傾向が顕著なってくるでしょう。そうした世の中で人間が人間らしく考え生きるにはいかに無駄を多く取り入れるのが重要であると考えています。その瞬間は無駄と想う知識がいつかのひらめきが変わるときが来るかもしれません。だからこそ、無駄が必要なのだと思います。もちろん何事もバランスが大事ですので、コンピュータで検索できることを頭ごなしに否定するのではなく、また本で得られる無駄な知識を否定するのではない、新しい考え方をしなければならぬ時代がおそらく到来すると思います。

いま、働き方改革や生涯現役社会など様々なことが言われていますが、大事なのは自分らしく生きることだと思います。人とは違う生き方をするために、いろんな本を読んで大切な無駄を集めて、その視野を広げてみるというのはいかがでしょうか。



毎日1ページの読書

一般科目理科 森 寛



『禅語百選』

：今日に生きる人間への啓示』

松原泰道著（祥伝社）

私は「ものづくり」が好きで、不器用ですが、大工仕事、機械いじりなどは好んでします。家庭で大工仕事をして褒められたことは一つもありません。しかし、野菜を作ったらたまに褒められるようになり、今では、特に「野菜づくり」に興味を持っています。どうしたらうまく野菜を育てることができるのかと考えながら、野菜づくりを研究して楽しんでいます。校内には専攻科の農業実習で使う畑が3か所、園芸同好会の畑1か所、そして寮生に薩摩芋を提供する畑1か所の合計5か所を開墾して、野菜づくりを行っています。退職してからは農業をしようかと思って土地を探しています。

そのような私ですから、じっと本を読んでいるより、何か行動している方で、若いときには、あれこれアイデアを出しながら奮闘し、夜遅くまで化学の研究・実験をよくやりました。研究での装置造りにガラス細工をすることになり、失敗しながら、また火傷をしながら、一人で格闘して作品を作りました。退職にあたり、苦勞して作ったガラス細工の作品を片づけることになり、まだ処分できずにいます。

そのようなことで、本はあまり読まずにいましたが、推理小説、自叙伝などは好んで読みました。最近、都城の図書館・まるまるに行きましたが、読んだ本は「野菜づくり」の本です。50才を過ぎてからは老眼鏡が必要になり、小さい文字の本は次第に拒否するようになっていきます。

今回、退職する私に原稿の依頼があり、読書する習慣がない私が、何を書こうかと悩んでいたところ、毎日1ページ、読書していること気づき、そのことを書くことに致しました。毎日読んでいる本は自己啓発書で、2冊あり、1冊は松原泰道氏の「きょうの杖言葉 一日一言 百歳の人生の師からあなたへ」、もう1冊は武田信孝先生の「一日一学 人生の杖言葉」です。それぞれ366日分あり、1日分の文字数は半ページから1ページ分の分量です。4、5年前から、ほぼ毎日、朝、読んでいますので、何回も目にして、今年もこのページに来たのかと思い、1年過ぎるのが速く感じます。難しい言葉、漢字がありますが、あまり深く考えずに読んでいます。これらの本は心の寄り所になっています。その中で、気に入ったところを抜粋して、この原稿を埋めたいと思います。

『日日是好日』

（悪天・逆境の日を好天・順境の日と比べないこと、積極的に荒天・悲境の苦痛を苦しみながら、好ましい日には得られない価値と意味を見つけたら、生きる喜びが得られる）

私の感想：百歳の松原泰道氏の三分の二になった私も、いろいろあり、今も失敗はあり悩みはつきませんが、嬉しいことも、失敗もよい思い出になっています。図書館の入口で、ふと見ると偶然にも、この言葉が掲示されていました。

『看脚下』

（脚下を看よ いま・ここで、自分は何を・どうすべきかをとっさに見極めて実行する）

私の感想：過ぎ去った過去を振り返って悔んだり、未来、先を思い心配して思い悩んでしまいましたが、今・現在起こっている脚下を見て、どうすべきかを

考えることだと思います。しかし、実際は先のことを心配してしまいますね。

『陰徳を積む』

(ものを大切に、人の目につかない所で、人としてなすべき行いをすること)

私の感想：徳は信用と読み替えることができるそうです。徳を積むことは、人からの信用を得ることであり、人徳を高めるように努力することは大切です。徳を積むのは大変ですが、徳を無くすのは簡単です。

『莫妄想 まくもうそう』

(妄想する莫れ・なかれ。物事を相対的に考えないこと。対立して考えると、どうしても選り好みをして執着心が起こります。この執着心を妄想といいません)

私の感想：執着心を持つと、そのことだけに囚われ、他のことを考えないようにになります。頑固にならずに、柔軟に考えることが大切だと思います。

『一日に一字を学べば、三百六十字』

私の感想：一つひとつ積み重ねていけば、大きくなっていきます。継続は力ですね。

『和顔愛語』

(ちょっとした一言や、さりげない微笑みが、人の心や社会を明るく、楽しくする)

私の感想：言葉の重みを感じます。しかめっ面よりも笑顔の方が楽しくなりますね。

『言霊』

(言葉に宿っていると信じられていた不思議な力。発した言葉どおりの結果を現す力があるとされた。)

私の感想：野菜も話しかけると育つそうです。

『一隅を照らす』

(隅の方を照らすのではなく、その人が、その場に居てくれるだけで、全体的に安心感がみなぎる)

私の感想：このような人になりたいですね。

『今は今しかない』

(今を大切に。僅かな時間をも大切に、惜しむ上にも惜しんで時を活用せよ。)

私の感想：歳を取ると、時間の経つのが速いんですね。今を噛みしめて、味わって行きたいものです。

『喜ぶ稽古』

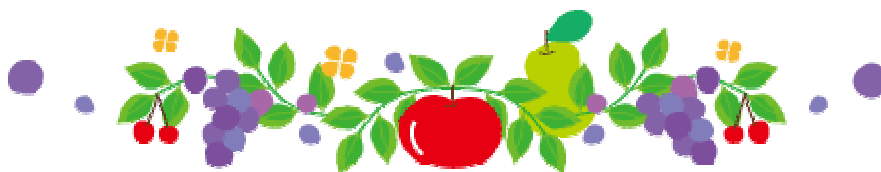
(喜びや腹立ちさは、向こうにあるのではなく、こちらの受信機にあるのです。喜べないことがあったかもしれないが、それは自分が受けきれない分だけが喜べないのです)

私の感想：喜びごとは上手に喜び、また、腹立つことはプラスに受け止めればよいことは分っていますが、難しいですね。

『平和の反対』

(平和の反対は、戦争ではありません。相手を無視することです)

私の感想：穏やかな対話、思いやり、そして、認めることが大切なのかもしれません。以上簡単な私の感想を添えて、少しですが紹介させていただきました。



第1学年

- ・機械工学科：枝元航
- ・電気情報工学科：植田丞美
- ・物質工学科：徳留滯

- ・建築学科：山下啓人

『変身』を読んで
 『君たちはどう生きるか』を読んで
 『よだかの星』を読んで
 一宙を駆けるよだかー
 『木』を読んで

第2学年

- ・機械工学科：黒木洋哉
- ・電気情報工学科：片山北翔
- ・物質工学科：中坂元

- ・物質工学科：堂園明日香
- ・建築学科：谷口陽菜

『人間失格』を読んでー私の『人間失格』ー
 『若き数学者のアメリカ』を読んで
 『イワン・テニソヴィチの一日』を読んで
 マロース
 ー酷寒の中の幸せー
 『神様2011』を読んでー神様の存在ー
 『檸檬』を読んで

第3学年

- ・機械工学科：武内詩乃
- ・電気情報工学科：梯真翔

- ・物質工学科：豊永和希
- ・建築学科：川崎壮士郎

『変身』を読んで
 『蟹工船』を読んで
 ー『蟹工船』から今と考えるー
 『砂の女』を読んで
 『阿Q正伝』を読んで

『変身』読んで

1年機械工学科 枝元 航

今自分は、自分の事を理解してくれる人がまわりにいることが幸せであることを、この本を読んで痛感させられた。もしも、自分が主人公のグレーゴルのようにある朝、巨大な虫になっていてその姿を家族に見られてもしたら家族はどういう反応をして、どういう行動にでるのかという事は想像したくない。

この物語の結末は救いがなく、グレーゴルに起きた不運がいかに理不尽であったかを痛感させられた。グレーゴルがなぜ虫に変身してしまったのが明かされることはない。彼が何か悪いことをしたから巨大な虫の姿に変えられたのではなく、何の理由もなく突然、巨大な虫に変身してしまった。彼が勤勉な会社員であること、家族の借金を返すために尽くしていること、妹の学費を自分が払おうと努力していることなどが述べられている通り、彼が不幸をこうむらなければならない理由を見出すことは難しい。彼の体験は、病気や事故などの人を突然襲う不幸と同じようなことであると思う。もちろん日々の生活の不注意が病気や事故を招く要因になることはあると思うが、避ける事の出来ない不幸は多い。グレーゴルはそのようなあり得ない不幸に見舞われてしまった。不運だったのである。

グレーゴルが見舞われた不幸はその家族にとっても不幸であった。家族の稼ぎ頭が働くことが出来なくなってしまう、経済的な問題におそわれる。そして、気味の悪い虫の世話をしなければならないというか、心理的な負担も抱えることになった。ところが、グレーゴル自身もその家族も、この不幸を解決しようとしなない。その点が疑問であった。もちろん人が虫の姿に変身するのはありえないことであり、その対処方法、普通の人間に戻す方法など誰にもわ

からないだろう。わからないから途方に暮れることは当たり前な反応である。しかし、虫から人間の姿に戻る努力や工夫はいっさい話の中に見られない。お払いやお祈りなど神に祈ることもなく、医者や科学者に見せることなどの科学的な解決法を試すこともない。グレーゴルは虫であることを受け入れ、家族は困惑しながらもおとなしく虫と同居し続けるのである。グレーゴルは次第に虫になった自らの体を自由に動かせるようになり、また、虫として快適に過ごす方法も見つけるようになる。グレーゴルは天井や壁を気持ちよく這いまわり、腐ったものを好んで食べる。妹はグレーゴルが部屋の中を自由に這いまわれるように家具をとりのぞく。人々の暮らしには緊張感が欠けているように感じられ、非常に奇妙な印象を受ける。

結局、家族は虫になったグレーゴルを受け入れる事はできなかった。家族の中で唯一理解していた妹も、「あたしたちにはこれを振り離す算段をつけなくっちゃだめです」と我慢の限界を口にする。かつてグレーゴルの会社勤めの収入によって家族が成り立っていた事は、家族の頭からすっかり忘れ去られている。家族はそれぞれ仕事をみつけ、新たな生活が始まっていた。グレーゴルの存在は彼らにとっては重い足かせになっていたのだ。

家族の我慢は確かに限界だったのかもしれないが、それでもやはりグレーゴルに対する態度はひどすぎると思う。彼らがもう少しグレーゴルのために行動してくれたらと思うってしまう。虫の姿になってしまったグレーゴルにとって救いとなるのは家族の理解以外にはないはずだからである。

『君たちはどう生きるか』を読んで

1年電気情報工学科 植田 丞美

この本には、コペル君が体験したことや考えたことを基に、私たちが立派な人になるために大切なことが書かれています。この本を読んで、私は初めて自分がどう生きるかについて考えました。

「自分が正しいと思ったことはごまかしたりせず行動に移す。」この言葉から行動に移すことは勇気がいるけれど大切なことだと思いました。私は、自分が間違っていたらと考えてしまい、周りの意見に流されてしまうことが多くあります。自分が間違っていたとしても自分が正しいと思ったのなら勇気を持って行動に移すべきです。周りの流れに惑わされず行動できるようになりたいです。また、自分が正しいと思ったことは、周りにもちゃんと伝えるようにしたいです。

「肝心なことは、世間の目よりも何よりも、君自身がまず、人間の立派さがどこにあるか、それを本当に君の魂で知ることだ。」この言葉から、常に自分が体験したことを基に自分で考えて判断することが大切だと思いました。他人から言われた通りに行動するのは簡単だけれど、結局周りに流されているだけです。教えられた通りに生きていくのも楽かもしれないけれど、自分がやりたいことを見つけて生きていく方が何倍も楽しいと思います。私は、中学生の時に高専祭を見て、高専生のやるべきことはしっかりこなし、自由に楽しく活動している様子から、高専に進学したいと自分で進路を決めました。実際入学してみると、大変なことも沢山ありますが、自分で工夫して楽しく生活しています。考えてみると、

私は自分の体験から考えて自分で判断できていることが多いように思います。これから色々な経験を積みながら、いつでも自分の本心の声を聞いて大切にしていきたいです。

「心に感じる苦しみやつらさは人間が人間として正常な状態にいないことから生じて、そのことを僕たちに知らせてくれるものだ。」という言葉から、苦しいことやつらいことや悲しいことにも大切な意味があるのだと思いました。コペル君が友達との約束を破ってしまい、自分を責めている場面も、その時は後悔してどうしたら良いか分からなくなっていたけれど、二度と同じ間違いは繰り返さないと思うきっかけになりました。どんどん悪いほうに考えてしまっていた時は、ただ苦しいだけだったと思います。してしまったことをいくら思い返したって変えられることはありません。そんな時は一度考えるのをやめて、今自分がしなければならないことに集中したら良いと思います。今の私にはまだコペル君のよ

うな経験はありませんが、出来れば後悔するようなことは無いまま生きていきたいです。

この本の中でコペル君は何度か人間を分子に例えています。人間を分子に例えるというコペル君の発想に驚きました。どこにいる人でも世の中という流れを作っている一部だなんて、私は考えたこともありませんでした。普段から見ているあたり前の光景にも、考えさせられることが多くあるのだと思いました。私もコペル君のような発想ができるようになりたいです。そして、そのことについて深く考えてみるのも面白そうです。

私が立派な人になるために、まずは自分が思ったことを言葉にして周りに伝えられるようになりたいです。また、自分が正しいと思ったことは行動に移すようにしたいです。そして、これからも自分で体験したことを基に自分で考え、自分の感情を大切にしていきたいです。何かにつまずいた時には思い出してもう一度読み返したいと思える本でした。

宙を駆けるよだか

1年物質工学科 徳留 滯

「夜だか」の名は、神様のさずかり物でした。顔や羽の色、嘴（くちばし）も足も全部、生まれつきでした。

よだかは、他の鳥にいじめられていました。私が読む限り、よだかの心は誰の心よりもきれいだと感じました。他に出てくる鳥や星達と比較すると、よだかの心には他者への冷たさが見られず、自分より弱く小さい虫たちを食べてしまった時、申し訳無さでいっぱいになり、苦しんでいる描写に特にその心のきれいさを感じました。そして、自分を許せなくなったよだかは改名をせまられ、身体を馬鹿にされた悲しみも合わせて、遠くへ旅立ちます。

その後、よだかは「星になりたい」と願い宙を舞います。しかし行き先の星達は全てよだかを否定し、よだかの願いを叶えてくれることはありませんでした。よだかは力尽き、「たしかに少し笑いながら」最後を迎えます。この箇所ではよだかの鳥としての描写はおしまいますが、この後の描写に、私は心を打たれました。力つく直前のよだかの瞳に映ったのは、美しく光る自分の身体と隣に輝くカシオピア座でした。宮沢賢治はこの物語の最後を「そしてよだかの星は燃えつづけました。」「今でもまだ燃えています。」と締めくくっています。

よだかは果たして幸せだったのでしょか。

鳥として生きるよだかは、弟に別れを告げ自ら命を絶つ程の思いをしました。そして、一生を終える寸前に願った夢は現実となり、星となり幸せになりました。しかしよだかが鳥として生まれたことに変わりはありません。

読後、このことをいくら考えてもはっきりした答

えがでませんでした。よだかに、「今幸せか？」と聞けばきっと肯定の言葉が返ってくるだろうと思います。しかし、神から授かった名前や身体のまま幸せになれなかったのか、と考えると、よだかが星になっていくこの物語は、現代社会の問題と一致するように思いました。今ここに在る自分の存在、価値を崩すものを宮沢賢治が表現したのが、よだかに「恥さらしだ」と改名を求めた鷹、そして家族の存在であり、最後に地獄へ突き落とすのは、きらきらと輝いて見える星たちであるように思います。以前、『よだかの星』の作者である『銀河鉄道の夜』を読んだ際も、同じ様な感想を持ちました。しかし、描写の仕方が心に迫り、かつ悲しさがにじむのは、今回読んだ「よだかの星」でした。

後々調べた所、よだかの星と思われる星座は見当たらない為、この星は宮沢賢治の想像であると思われます。しかし、「今でもまだ燃え続けている」という表現は、報われた、という事を表すのか、無念は残るという事を表すのか、さまざまな見方ができます。よだかの姿と重ねてしまう人物が身の周りに居たためか、とても思い入れのある一作が、今回増えました。第三者の目線から語られるこの話だからこそ、現代を生きる人間の身の周りで起こる出来事や、テレビで見かけるいじめの将来と重なったのではないかと考えます。

「もしも自分がよだかなら」と考えるのはとても難しいし、その気持ちになるには似たような事ではなく同じ事をされなければ不可能だと思います。それは加害者側も同じです。しかし語り手目線で見ると、「自分が何をすべきか」とすぐに疑問となるし、

当事者の気持ちをくみ取ろうと一緒に考えてもらえるようにもなります。また、もしも自分の周りに実際によだかや鷹の様な関係が思い当たるのなら、無理に関わりを持たずとも自分の中にやるべき事が見えてくるはずで。

この本は、よだかの星と同じように、もっと多く

『木』を読んで

僕は、「木」という本を読みました。なぜこの本を読もうと思ったのかと言うと、まず題名が、「木」というシンプルなもので、この様な本は初めて目にしたので少し興味を持ちました。そして、そのシンプルな題名で一体中身はどの様な内容なのかとふと思ったからです。また、木でもそのまま木に関する本かそれとも木に関する物語なのか気になりました。

この本の第三章にある「ひのき」と言う場面の木が活気あふれて立っていることが良く分かったという所で、木から気が出ているということは何の様な事なのだろうと考えさせられました。そこで作者は「もっと伸びるのだ、もっと太ろうとしているのだ」と言っているような意志を感じさせられたと言っています。僕は気と言う非現実的なことがあるのかとどうしても考えてしまいます。ですが作者の意見を読むとなるほどなと思うところがあり、もっとものの考え方を変えようと思いました。

夏の檜と言えば葉がたくさんついているような、秋の檜と言えば橙色に葉がついていたり所々枯れていたりする姿を思い出します。ですが作者は、夏の檜は、とにかく静かになどしてはいない、音を立てて生きている、と言う姿だ。秋の檜は尋常でおとなしげに、やさしげでそれですら親しみやすい柔和を示していた、というような表現で書いていて、僕はその想像や表現が結構気に入りました。作者の孤独な書き方は読んでいて面白いと思いました。

私の『人間失格』

「恥の多い生涯を送ってきました。自分には人間の生活というもの、見当つかないのです。」

この言葉は、大庭葉蔵という『人間失格』の主人公の男が残した手記の冒頭の言葉である。この大庭葉蔵という男は青森の大金持ちの家に生まれ、一時をその家で暮らした。しかし、葉蔵は子供の頃から人にとって当たり前な生活というものに疑問、そして恐怖感を抱えていたのだった。そして、ついには幸福とは何かを考え、自分は幸福なのかどうかも深く考えはじめるようになった。子供の頃から、人間の生活を深く考え込んでいた葉蔵だが、これは誰にでも経験があるのではないだろうか。子供の頃に限らず、今、かつて、なんでこんな生活を送っている

の人の心の中で輝くべき本であると思います。よだかの様な心を持つ人が増える事を願う人は数知れないのに、鷹と同じ行動をとる人が減らないのはなぜなのか考えてみたいと思います。

(宮沢賢治「よだかの星」)

1年建築学科 山下 啓人

二本の檜が晝一枚分の間隔で生えていて、その木を兄弟やライバルとしてみる場面があります。一見どちらかが先に伸びもう一方は成長がしづらくなるだけの事ですが、作者はこの場面の木を擬人化して二人の人間として見ていてそれが人間の本能のように見えて面白いです。この二本の間でライバルとしての成長争いがあり、その争いは僅かな差でも先に伸びた方が勝者と言う争いです。それで勝った方の木は勢いに乗って枝を伸ばし、負けた方の木は伸ばそうとする頭をおさえられる。といった、木ではなく、僕たち人間の競争を見ているように感じられて、ただ木を眺めているだけではなく、その様に物事の様子を深く考え今どのようなものであるのかなどを日々考えられるようになると、普通に当たり前なことも楽しく面白くなるのではないかと思います。

この本を読んでいると、色々と思うところがあります。ですがそれが自分の一生に役立つところなどもあり、作者の思う世界に入っていく感じがしてとても面白い本だと思いました。最初は、この本の作者の面白い考え方が分かるとは思っていませんでした。

この本のようにシンプルかつ深い考えや思いが込められていて、作者の考え方がそのまま入っている本をまた読みたいと思いました。そして本から学ぶこともあることを知ったので、色々な本を読みたいと思います。

2年機械工学科 黒木 洋哉

のだろうか、というように、疑問を持ち、考えたことがあるはずだ。私にもある。何故、ルールを守らなくてはならないのか。何故、生まれた家の文化、国の文化を守り、浸らなければならないのか。そう思うたびに、自分は人間ではなく、人の形をした別の生物なのではないか。と、自分で自分が人間なのかを疑ってしまう。しかし、それでもルールを守り、文化に浸っている自分がいると、まるで人間の本能が出ていると感じて、やはり自分は人間なのだ改めて感じさせられる。これも人間の本能なのだろうか。

話を戻すが、子供の頃から人の生活に不安や恐怖、疑問を抱いていた葉蔵だが、次は人の心について考

えるようになる。例え、自分の家族であっても、自分の安全を考え、相手の機嫌を取るようになっていった。そしてそのまま大人になっていき、その過程で特に女性に対して女とは一体何なのだろうか、と考えるようにもなった。そんな彼は夢として、立派な絵描きになろうとしていた。しかし、その夢は叶わず、結局粗悪な雑誌の無名の下手な漫画家になっただけであった。また、その頃の葉蔵はすでに人として生きることに疲れ、当時好意を寄せていた女性と共に心中を図った。しかし葉蔵だけ助かり、彼にとって人として生きていくことが、ますます辛いものになっていった。

私も人の心や異性、そして将来について考えた事がある。人の心、それは決して見ることのできない、知ることのできない一番難しい物なのだと考え、異性の心など何一つ分からないのではないかも考えていた。心という物は自分にしか分からない。今もずっと私は思っている。また、将来については子供の頃からいくつもの職業に魅せられ、それと同じ職業に夢を持った。しかし小学校に通い、中学に行き、気付いた。夢がころころと変わっている事に。ずっとこの夢を追いかけて、いつか叶えてみせると思った夢でも、気付いた時には冷めて、また新しいものに夢見ていた。高専に入った時、そしてその前は、ロボットエンジニアになるという夢を持っていた。しかし、一年の半ば頃からしだいに、アニメーター、

イラストレーターになりたいと思うようになった。工業の専門学校に入学して早々、工業とは全然別の分類の職業に夢を持ってしまったのである。その日から、何故高専に入ったのか、今後どうやったら今の夢を叶えられるのだろうか、と思うようになり、ついには、夢はワガママにいくつも持つてはいけないのだと思うようになった。

心中に何度も失敗した葉蔵は、葉に溺れていき、人でありながら人としての要素を次々と壊していった。そして、彼は唯一の友人に、脳病院に入れられ、牢獄とも言える病室の中で廃人として生きるようになった。

人とは一体何なのだろうか。命とは何なのだろうか。人として生まれたくなかったのに生まれてきてしまった、という人もいれば、人で良かったと言う人もいる。私は、人で良かったとは思っていない。人は他の動物とは異なり、コミュニケーションをとり、他人と協力しながら生きている。一人で生きていくのは難しいのだ。このようなコミュニケーション能力が必要で、他人の気持ちを理解する力が必要である今の人間社会の中で、人と接する事が苦手であり、嫌いである私にとってこの人間社会を上手く生きていく事はできないのだと思っている。私はこんな事を考える自分が嫌いだ。人と接する事が苦手で嫌いであるのに、人である自分が嫌いである。こんな自分もまた、人間失格なのかもしれない。

『若き数学者のアメリカ』を読んで

2年電気情報工学科 片山 北翔

この本の内容は、主人公である藤原正彦が一年間、アメリカ・ミシガン大学から研究員として招かれるところから始まり、アメリカにいる間の出来事について書かれたものである。私が、これを読んでとても印象深かった部分が二つある。

一つ目は、正彦が研究の疲れや、ある出来事をきっかけにノイローゼのような症状に陥るという部分である。ある出来事というのは、研究室のシュミレット教授からの数学の問題をすぐに解けてしまったために、正彦は教授からの返事が返ってくるまで、間違っているのではないかと自信を無くしてしまい、何もする気がなくなってしまったのだ。私は、この時の筆者の心情に共感した。私も失敗した時、人からそのことを咎められることが嫌なので、失敗しないように何度も練習や確認をしたり、自信があっても他人に失敗を指摘されるのが怖くて他人に聞こうとしなかったりした。また、私はあるプレゼンテーションで緊張して頭の中が真っ白になり、質問に答えることができなかったという体験もあり、そのことが終わってからのほうがとても恥ずかしかった。それで今後は、あのようなことにならないように、練習や準備を徹底しようと思った。

二つ目は、アメリカの大学生のことを述べられていた部分である。正彦はノイローゼになった後、休みを取って疲れを癒しコロラド大学で働き始めた。「アメリカの大学は、日本とは違い大学の名前による差があまりないため、卒業の際に良い成績を残す以外に他人との差をつけられない」とあったので、私は、日本とアメリカではこのような違いがあることに大変驚いた。日本の場合は、普通、最終学歴が重要視されるので、多くの人が良い大学に進学しようとする。しかしアメリカの場合は、どこの大学に行っただけではなく、最終的な成績が重要視されているらしい。また、高校までは自分の意見を他人に簡単に説明することができるか、どのように他人と協調して仕事をするかということを重点に置いているらしい。私は、アメリカのように発言力などを鍛える授業を、日本でもより多く行って欲しいと思った。私のように、人に自分の言いたいことをうまく伝えられない人も少なからずいるだろうし、社会に出るとそのような力が必ず必要になると考えているからだ。また、アメリカの大学生は、そのような力を高校までで鍛えるので、あまり勉強というものをしたことがないとあった。私は、それはあまりよくない

のではないかと思った。ある程度の知識も若いうちに覚えておかないと、後々が大変になると思っているからだ。発言力を鍛えながら知識についても学ぶ、ということは少し難しいのかもしれない。しかし、それができれば、さまざまな人が社会で活躍できるようになるのにと考えた。

最初この本を見たときは、何か数学に関することしか書いてないのではないかと思っていた。しかし、実際に読んでみると、普段の暮らしの中で分からないことは、ほかの国を訪れて初めて気が付くことが

あるものだと感じた。近い将来、私はアメリカをはじめ、いろいろな国々を訪れたいと思っている。今までは、仕事で他国の技術を学ぶために行きたいとか、単に観光のために行きたいと思っていたが、この本を読んだことで、日本の素晴らしさを知るという意味でも海外に行ってみたいと思った。そしてこの本は、日本は他の国々と比べて劣っている、素晴らしいところがどこにもないと思っている人に手に取ってもらい、日本の素晴らしさを知るきっかけになってほしいと思う。

マロース 酷寒の中の幸せ

「見ろよ！外はマイナス 30 度だぜ！」「囚人ども！階段から降りてこい！」「ならず者！へド野郎！卑劣漢！」

遙か彼方まで続く、広大で冷たく残酷なシベリアの大地のラーゲリ（強制収容所）では、今日も澄んだ空気の中、囚人や看守の怒号が鳴り響く。今では信じられないだろうが、70 数年前まで苛酷で劣悪な環境の中、数百万～数千万の人々が強制労働を行っていたのである。その中にはシベリア抑留による日本人も含まれる。

この強制収容所での生活を生々しく克明に描いた作品が、実際に収容所に送られ無事に生還したアレクサンドル・ソルジェニーツィンによる『イワン・デニーソヴィチの一日』である。

物語はラーゲリに送られ刑期を務めているイワン・デニーソヴィチ・シューホフ（以下イワン）の視点で、題名の通り収容所での一日の様子が描かれる。朝五時半に起床。外は絶対零下三十度。朝食は黒いキャベツばかりのスープと粗末な粥。寒さの中身体検査のためにシャツのボタンまで外さなければならぬ。日中はひたすら労働。ものを運んだりブロックを積んだり。日が沈みどんどん寒さが厳しくなる中点呼が行われる。一人でも揃わなければ酷寒の中全員が待ち続けねばならない。もちろん夕食も粗末なもの。そして薄っぺらい毛布に身を包み眠りにつく。この繰り返し。それでもイワンは最後にこう言っている。

「一日が、すこしも憂うつなところのない、ほとんど幸せとさえいえる一日がすぎ去ったのだ。」私はこの本を読み終えた時に、二つのものが思い浮かんだ。街中を無機質に歩く現代日本人と大地をたくましく歩くクマである。

現代日本人の学生たちは眠そうな顔で登校し、大半は実につまらなそうな表情で講義を受ける。講義・授業に面白味を見出せず他のことに興じる有様。社会人の大半は大混雑する電車ですし詰めになり、上司から仕事を渡されパソコンや小難しい書類とにら

2 年物質工学科 中坂 元

めっこ。そして日が暮れて無機質な表情で歩き、家へと帰りゆく。日本の学生や働く社会人全てがこうでないにしろ、決して少なくはない人数がこのようない日を過ごしていることだろう。現在の日本では労働時間の超過が問題となっており、労働環境の整備も課題となっているほどだ。

マロース

現在の日本は酷寒の社会になっているように思われる。

入学した方がいいが学業に楽しみを見出せず、無機質な毎日を送る学生。良好とはいえない雇用条件で夜遅くまで働き、家族との時間が減り続ける社会人。人によっては精神を病んだり最悪自殺にまで発展す

マロース

る。目にははっきりとは見えないが日本は酷寒の中にある。シベリアの冷風のように厳しい風当たりを受けることもあれば、じわじわと体温という幸せの実感を奪われやがて心の病に至ることもある。人によって感じ方に差が出るとはいえ酷寒は徐々に身体と精神を蝕んでいく。

これらを助長するのは、正直者が馬鹿を見る風潮だ。代表例としては半年ほど前に話題となったボランティア参加による単位認定が挙げられる。ボランティアに参加することで学生の単位を認定することを少なくとも大学が検討をしておき、文科省も推奨しているという。このようなことで単位が認定されるのであれば、勤勉にやってきた学生たちはどうなってしまうのだろうか（そもそもボランティアとはどういうものなのかという話なのだが）。自分で学費を稼ぎながら日々の生活費を削り、寝る間も惜しんで勉学に励んでいる人も多くいることだろう。そういう人たちにとっては実に暮らしにくく、冷たい社会の風潮がこの酷寒を助長している。

また、皮肉なことに社会主義とも似通う。要はノルマが達成できればいいので、一人が基準以上の仕事をしていれば他の人がサボっても問題ないのが社会主義の最大の欠点だ（利点もないわけではないが）。ソビエト連邦などの社会主義国はこの問題を抱え、

最終的にソ連の経済は行き詰まった。正直に勤勉に誠実に基準以上の仕事をしてサボっている人と報酬が同等ならば、必要以上に働くことは実にバカバカしいことなので、生産性・成長性が下がってしまうからだ。こういった「あいつが一生懸命やってるからサボってもいいか」「みんなやってるし、自分もそうしよう」といった流れができてしまうと、正直者は馬鹿を見続け辛い境遇に置かれ、流される人たちはのりくりと生き続ける。このような酷寒の中を現代日本人は歩み続けているのだ。

ならばクマはどうか？群れをなさず単独で森や大地を歩き回り、基本的には山のものを食べて揉め事も起こさず静かに、されどたくましく生きていくクマの姿はどことなく、イワンに似通っているように私には思える（もっともイワンが厳しい寒さの中働くのに対し、クマは冬眠するが）。イワンは決してめげない。どんなに寒さが厳しくとも、どれだけ罵倒されても、どんなに嫌な奴がいても、絶対に折れず、たくましく一日一日を生き続ける。閏年のために、三日のおまけがついた三千六百五十三日を彼は強く生き続けた。

決して楽な一日ではない。食べたいものが好きなだけ食べられるわけではない。もちろん愛する家族とも離れ離れ。何かやらかしたり上官の気に入らなければ重倉倉入りを命じられ、場合によってはそのままの屍となることだってある。それなのになぜ、イワンは「ほとんど幸せとさえいえる一日」と感じるができるのか。それは、彼が一日に起こるほんの些細でちっぽけなことに大きな幸せを見出しているからだとは私には考える。

ひと時の休息、ひとかけらのソーセージ、一本のタバコ。イワンはこのような実にちっぽけなものを心の底から体全体で楽しむ。その楽しみようは読んでいるうちにタバコを一口でいいから吸ってみたいとつい思ってしまい、ソーセージをこんな風に食べてみたいと思ってしまうほどだ（無論、喫煙をするつもりはないが）。イワンは寝る前に自らの一日をこう振り返る。「今日一日、すごく幸運だった。倉倉へもぶちこまれなかった。自分の班が社生団（社会主義生活団地の建設現場のこと）にもまわされなかった。昼飯の時はうまく粥をごまかせた。班長はパーセント計算をうまくやってくれた…。」このような感じで一日の中の幸せと次々と見出していくのだ。

この些細な幸せを見出すことこそがイワンの強さの秘訣なのだろう。健康状態は精神状態に大きく影響される。楽しい気分であれば健康的でいられるが、ネガティブで暗い気分がずっと続けば健康状態はどんどん悪化する。事実、戦時中に収容所にいた人た

ちの中で生き延びた人たちの多くは常に明るく日々を楽しんで生きていたという。

シベリアのラーゲリほど劣悪な環境ではないにしても、酷寒の中を生きる現代日本人もイワンの習慣を見習うべきなのではないかと思う。

寝る前にその日にあったいいことを彼のように、まずは三つ思い浮かべてみるとどうだろう。きっと3つどころではないことに気づき、あれもこれもとなるだろう。小さなことに潜む大きな幸せは至るところにあるものだ。例えば、今生きていること、衣食住に困らないこと、一緒にいてくれる人がいること。他にもたくさんあることに気づくとともに、今までごく当たり前だと思っていたものが、実は幸せなことであったことに気づくだろう。

一日を、二十四時間を、千四百四十分を全力で過ごしてみるとどうだろう。普段の何気無い業務や家事、宿題、部活動。全力で何かに取り組むことで、何かを達成したり、取り組むことができる幸せを感じることができるかもしれない。今まで完全受動的に受けていた講義も意識して聞いてみると、実はこういうことだったとか、こういうことにも使われているとか、興味深い発見があるかもしれない。

普段何気なく歩いていた道にも、何かおもしろいものを見つけ、それが心にひと時の安らぎをもたらしてくれるかもしれない。一日を一生懸命に、全身全霊で生きれば、こういった多くの物事の中にたくさんの幸せを見出すことができるだろう。ボーッと生きていてはダメなのだ。くよくよ考えるのをやめて楽観的に、時に皮肉的に物事を考えてみてはどうだろう？今のことをあーだこーだ考えたり、過去のことをあのときあーあしていけば今頃…と、悔やんだりするくらいなら、顔を上げて背筋を伸ばし、これから先の楽しみなことを見つけてみたらどうだろう。ちょっと辛いことも笑いに変えられることだろう。そして、笑いながら自分は今、幸せであるということを感じることができるだろう。

酷寒の中にある自分の悲運・不遇を嘆くばかりで何もしないのか。それとも日々小さなことの中に大きな幸せを見出し、楽しく強くたくましく生きていくのか。どちらがより良い道かは火を見るより明らかだろう。イワン・デニーソヴィチは我々に一日を全力で生き、小さなことの中に大きな幸せを見出し、希望を抱いてたくましく生きることの大切さを、遠いシベリアから教えてくれた。

ブラーン

これから何十年も続く人生。大吹雪にさらされ、酷寒に苦しみ、世の冷たさに絶望することが幾度となくあるだろう。しかしその酷寒の中に幸せを見出したい。どんな些細なことでもいい。幸せの炎を少しずつ心に灯し、クマの如く、たくましく堂々と世を生きていきたい。

神様の存在

もう元には戻れない世界、ただその世界は現実とは良い意味でも悪い意味でもかけ離れていた。本のタイトルにもある「神様」とはどんなものだろうか。そして冒頭から出てくる「くま」とは何者だろうか。

川上弘美さんによる『神様2011』を最初に読んだ時、「これは幻想なのか。」とってしまった。しばらくして読み返してみると夢でもない、ただ現実というわけでもない世界だと感じた。不思議ななんとも言えない感覚が残ったまま読み進めた。

何回も出てくる「あのこと」とは一瞬で何の事か分かった。題名からも分かるように2011年といえば、東日本大震災が真っ先に浮かぶ。私が小学4年生のころ、帰宅途中に近所の理髪店のおばあさんに声をかけられ、店のテレビを観ると恐ろしい波が町を呑み込んでいた。その時はまだ予想だにしない福島第一原子力発電所事故は後のニュースで知った。その時のことを鮮明に覚えている。今もなお被害に苦しんでいる人々がいると考えると胸が痛い。

この2011年に起きた事故のことを「あのこと」としてあえて伏せているのは、なぜだろうか。私は、「あのこと」と表現することによって直接的なことを思い出させずに、しかしながらしっかりと事実を伝えるために選んだ言葉だと思った。原子力による事故であることは同じかもしれないが、「あのこと」が読み手一人一人違うように感じるのかもしれないと思った。

「くま」は昔気質であったと書いてあったが、その通りでありそれに加え、気を遣ってくれる優しい性格だ。私のまわりには「くま」のような性格の友達が多い気がする。自分のことだけではなく、まわりにも細かく気を配ってくれる。私は「くま」のような性格に憧れる。この「くま」は「くまは人間よりもストロンチウムやプルトニウムにも強いんだっ

『檸檬』を読んで

何を言いたいのだろうか、初めて読んだ時、私はただただそう感じてしまいました。でも、二回、三回と読んでいくうちに理解できるようになり、だんだんと面白いと感じるようになりました。

「えたいの知れない不吉の塊」、これはあえて明確にしなかったのだろうと私は思います。その言葉を見た時、私が中学生の頃に感じたものと同じかもしれないと思いました。私は中学生の頃、不安にかられ、自信をなくし、何もできずに家で寝てばかりでした。それなのにイライラして、家族にきつく当たってしまった時期がありました。今思えば、家族はととても迷惑をかけてしまったと申し訳なく思います。ですが、その頃の私は、その闇の中に迷い込んでしまったような状況

2年物質工学科 堂園 明日香

てな」と男から言われ、それに対して「無理もないのかもしれませんが。」と言っている。もし私が「くま」の立場であったら、こんな穏やかに誰も傷つけない言葉を言えない。むしろ、言い返しているかもしれない。「私だって生き物なんだから。」と。

物語の中盤、くまが魚を捕って干物にするシーンが描かれている。しかし、その魚は放射性セシウムが含まれているえさを食べており、人間やくまが食べ物として扱うのは厳しい。そのことを知ってながらも、くまは「記念に形だけでもと思って。」と「わたし」に言っている。神様は意地悪だなあとただただ思った。「あのこと」さえなければ「くま」も「わたし」も魚も日常が送れていたのだろうと思う。

結局「神様」はなにか恵みを与えてくれたのだろうか、自分には分からなかった。しかし、最後の方で「くま」は「わたし」に「熊の神様のお恵みがあなたの上にも降り注ぎますように。」と言っている。熊の神様は人間の世界の何を知っているのか、全く違う世界にいるはずなのに熊の神様から私たちは恵みを受けてもいいのか、大丈夫なのかとってしまった。人間は何にも勝てない、なんて無力な生き物なんだろうとも感じた。

「くま」という存在が「あのこと」が起こる前の陽と起こってからの陰の部分にくっきりと表現している。これは熊という動物のイメージが優しくもあり怖くもあるからだと思った。

最後に、「わたし」が「悪くない一日だった。」と言っている。本当は不安も多かったはずなのにちょっとした幸せなことでプラス思考になれる。私も、これからはそんなアイデアを少しでも日常に取り入れて生活していこうと思う。

2年建築学科 谷口 陽菜

から、なかなか抜け出せずにいました。その原因として、趣味も友人も少なく、外出もしていなかったため、解決するためのきっかけが見つけれなかったことが挙げられると私は思います。

そして、解決のきっかけとなったもの。それは、高専への進学でした。私のことを何も知らない場所、私が何も知らない場所に行けることが私にとっての希望、光になったのです。進学するまでの生活は、ただの過程であると自分に言い聞かせて過ごし、何もかも考え過ぎないようにしていました。

この行動は、この本の「時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、其処が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——と

いう錯覚を起こそうと努める。」の部分に似ていると思います。普段から見慣れている土地ではない、遠く離れた場所を訪れ、無駄なことを考えずに心を休ませたい。そんな願望を現実と重ね合わせ、想像と現実の狭間で感情を誤魔化し、生きていく…。私もこれと同じで、何もかも過程であると考えてることによって、現実の「今」を見て見ぬふりをし、きっといつかはこうなるという明るい「未来」を想像し、それらを重ねて自分なりの解釈をし、騙し騙しの毎日を過ごしていました。

「黄金色に輝く恐ろしい爆弾」この言葉だけを聞いて、これが檸檬だとすぐに分かる人はいないと思います。これにより、不思議で怪奇ながらも面白い捉え方で読者を楽しませる魅力となり、印象の残る作品になっていると考えます。そして、十分後にそれが大爆発をしたら、どんなに面白いかと想像する場面は、読んでいた私も思わずニヤリとしてしまいました。それほど、私はこの作品に引き込まれていたのです。

この作品に引き込まれる魅力は、何を見ているのか容易に想像できるほどの細かい描写です。細かいすぎるのでは？と感じてしまう人もいるかもしれませんが、描写が細かいことによ

って、レモン色が強調され、いかに檸檬が輝くように見えたのか分かります。

『檸檬』この本は、私の成長した部分を気付かせてくれました。去年、この本で感想文を試みようとしたものの書くことができずでした。それは、きっと思い悩んでいることが解決して間もなくで、気持ちの整理がついていなかったからだだと思います。高専に進学した今では、中学の頃もそんなに悪いものではなかったと思います。家族にも友人にも恵まれていたし、学校も楽しかったです。ただ、視野が狭くなって、一人で思い悩んで塞ぎ込んでいたのです。自分の周りにある身近な幸せに気付くことができなければ、思い悩むこともなかったと思います。ですが、このこともその経験があったからこそ気付けたのです。

中学、高校の時期、この年齢は誰もが思い悩んでしまうと思います。「えたいの知れない不吉の塊」という闇の中から、「檸檬」のような自分の光となる存在を見つけ出し、何とかそこから自力で脱出する。この作品は、そんなことを教えてくれたような気がします。

『変身』を読んで

「ある朝、グレーゴル・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な虫に変っているのを発見した。」

唯一無二の独特な一文から幕を開ける、フランツ・カフカ氏の代表作【変身】。以前、友人がこの作品について語っていたことを思い出し、手にとった。著名な作品でもあるし、本を読んで損などあるはずもない。決めかねていた読書感想文の候補にもなる。私は小さな文庫本を持ち帰ることに決めた。

ずばり感想を言うのならば、“悲しい”と“ひどく不快”という二つの感情に集約されるように思う。

グレーゴルが変身してしまった虫というのは描写から想像してみてもかなり気色が悪いものではあるのだが、私は彼に同情せずにはいられなかったし、彼に対する家族の態度が冷たすぎるのではないかと、思わずにはいられなかった。姿形は変わってしまったとしても、彼はそれまで家族のために精一杯尽くしてきた。その事実は変わらないのだから、せめてあんな悲しい最期を迎えてしまわないような選択が出来なかったのだろうか。分岐点はいくつもあったはずなのに。最期まで家族のことを想い続けた彼のことを思うと、家族が憎くさえ思え、悲しかった。

それと同時に、私は不快感を禁じ得なかった。これは、この【変身】という作品の特異極まる内容と、結局明かされることのない“グレーゴルは何故、その姿を虫へと変えてしまったのか”とい

3年機械工学科 武内 詩乃

う謎に起因するものだと思われる。正直なところ、自分でもはっきりしたことが言えず、それがまたもやもやとして気持ちを悪くさせる。特に先に述べた謎は、作中最大の謎であるにも拘らず、カフカ自身は何も語ってはいないのだ。そんなの、読者は気になってしまって仕方ないではないか。

私が奇妙に思う点は他にもある。まず、グレーゴルが変身してしまったことに対して作中の誰もが大了た疑問を抱かないこと。明らかに不自然極まりない、現実味のない事象が起こっているのに。また、彼が家に居られたことも、ある意味では不自然なのだ。最終的には追い出してしまおうという考えに至っているが、あまりにも遅い気付きではないのか。それまでは家族としての愛情があったのか？しかし、彼の視点からとはいえ、彼らの苦しみをを見てそれは無いのではないかと私は考える。では、何故グレーゴルを家に置いていたのか？考えてはみたものの、これは、人間の複雑な部分だとしか言いようがなさそうだ。彼の死の原因は、まず間違いなく家族の彼への対応であったのに、それは自明のことであるのに、彼の死後、彼らも少しは泣いているのだから。それがどういう類の涙であったのかは様々な憶測が出来るが、人間の複雑さの前では決して断言は出来ない。ただ、少なくとも私は、彼らのグレーゴルへの感情は、愛情とは言わないのだと思う。

そして、もう一点ある。何故、グレーゴルの気持ちは少しも理解されなかったのだろうかということだ。たしかに言葉は通じなかったわけだが、彼

は態度で十分示していたはず。カフカの表現を私なりに想像してみたときに、私なら彼の気持ちを、考えていることを

もっと押し量ったかもしれないと、本気で彼のことを救ってやりたくなかった。そう思ってしまうほどに、彼の態度はあからさまで、分かりやすいものだったのだ。虫が人間の言葉を理解出来るわけがない、感情を持つはずがないという思い込みがあったにせよ、彼の態度の一切に疑問をもつことはなかったのか。それが出来ないほどに、誰もが追い込まれてしまっていたのだろうか。

以上が率直な感想だが、ここで著者であるフランツ・カフカ氏について少し考察したい。彼は一体何を思って、こんなにも独特で珍妙な世界を創り上げたのだろうか。私が思うに、グレーゴルという人物はカフカそのものを表しているのではないだろうか。カフカは生前、長く同じ勤めをしていたという。しかも、好き好んでその職を続けていたわけではないと。そのあたりがグレーゴルと共

通している。グレーゴルの職について事細かに、事あるごとに語られているのは、そういったところに起因しているのだろうと思った。そしてカフカは、そんな単調な毎日に何か、変化がほしかったのだ。それも、どうせならひどく珍妙な、そういった変化を。グレーゴルはきっと、カフカの願望なのだ。

さて、悲しいだの、不快だの、果ては著者であるフランツ・カフカ氏を変態的に考察までしてみせた私だが、勘違いされそうなのでこれだけは言っておきたい。私はこの作品が嫌いなわけではない。むしろこの作品は好きな方であり、フランツ・カフカ氏の感性を羨ましく思いさえし、人にもぜひと勧めよう。最終的に私は、グレーゴルというひどく哀れで家族愛溢れる男に愛着を持つことが出来たし、カフカが紡ぐ独特な世界はとても魅力的だ……。

次は、林檎を片手に読みたいと思う。

『蟹工船』から今を考える

蟹工船を読み終えて、当時を生き抜いた人々は、特別な考え方を持って生きていて、その考え方は、現在のような戦後教育によって普及した、労働や人権に対する考え方とは違ったものだったのだと思います。また、それ故にストライキやサボタージュに対抗していく姿は凄く勇敢でした。労働運動は、学者や机上の論から始まったわけではなく、現場で働く人々の汗や血、努力、熱気から始まったのかもしれないと思いました。

また、印象に残っている場面があります。それは、漁で用いる網を海に投げ入れ、それを引き上げて魚を捕るために、川崎船という船が、8隻もの小船を積み、荒れた海の中駆り出され、そのうち1隻の行方が分からなくなってしまった場面です。川崎船は、カムチャッカ半島に流れ着き、船員たちは現地のロシア人たちに助けられました。言語も違い、会話が通じない中、片言の日本語を話す中国人がこう言いだします。「日本では働く人が貧乏になり、金持ちの腹が膨れる」と。北海道とロシアは交流が深く、労働運動が盛んであったロシアから大きな影響を受け、労働に対する考え方が変わっていった、ということを知ることがあるのを思い出しました。

また、「おい地獄さいくんだで」という書き始めにも驚きました。

オホーツク海で漁をする蟹工船。その労働環境・生活環境は汚れていてボロボロ、さらには、異臭をも放っていたという。まさに「地獄」のような環境であったのだと思います。

船内の労働者たちはとても「人間らしい」とは思えないほど辛く厳しい生活の中、倒れるまで働かさ

3年電気情報工学科 梯 真翔

れ、ろくに休ませてもらえません。今の日本では考えられない状態です。

そこには、蟹工船のお偉いさんである「監督」が誰よりも権力を持っていたことが関係しているのです。

“給仕はかつて、こんな状態の船長を一度も見たことがなかった。船長の言ったことが通らないだっけ？バカ、そんな事が。しかし、それが起こっている。——給仕にはどうしてもわからなかった。”この場面から蟹工船内の「監督」がどれほどの立場なのかがわかります。

「鮭殺しの棍棒」を持った、蟹工船の最高権力者である監督は船員全員に厳しく接していたようです。“貴様らの一人や二人がなんだ。川崎船一隻でも取られてみる、たまったものじゃないんだ。”利益を最優先し、船員のことなど考えていない監督の言葉です。監督や企業の人にとっては船を守ることのほうが大切なのでしょう。

彼らは、蟹工船で働いている労働者たちのことを「匹」で数えていて、人間としては扱っていません。仕事ができないと、殴って叱り、助けると無駄なエネルギーや時間、燃料を使うから、という理由で、沈みそうになって助けを求めている船を置き去りにしたりと、平気で残酷なことをします。彼らの行動のほう人間ではないかのようでした。

しかし、監督はそれでも利益を上げるためにどんな手段でも使います。結果を出した者と、結果を出せなかった者とを、明らかに区別し、ひいき目で見たり、罰を与えたりします。しかも“日本国民として”とか“お国のため”とか、あたかも、自分がや

っていることこそが正しいかのように正当化します。

こんなにも残酷でむごい労働をさせることは、作中での“タコ”のように自分の将来を全く考えていない醜い行動だと思います。タコは、自分の命が危険になると、死なないように、自分の脚を食べて生き延びようとします。しかしそんな行動は、今この瞬間を耐える方法としては理にかなっていて、賢い行動なのかもしれませんが、長い目で見ると、最善

『砂の女』を読んで

『砂の女』は休みを利用して新種の昆虫を探すために海辺の部落を訪れた男の物語である。男は、砂の穴の中にある女の家に一泊し、帰るつもりであったが、部落の人間にはめられ、穴から出られなくなってしまい、あらゆる手を使って抜け出そうと抗う、といった話であった。

読み終えての率直な感想は、あまり良い物ではない。何かがずっと引っ掛かったように残るのである。それは恐らく僕自身の「不安」や「迷い」なのではと後に考えた。男に感情移入して読み進めると、どうしても最後の行動が納得できなかった。結末を述べると、男は砂の穴の不自由から逃げ出す機会があったにも関わらず、逃げなかった。むしろ穴の中に留まろうとする意志まで見えた。この点が不思議でならなかったが、ある一つの考えが浮かんだ。男にとっての砂の穴の中が本当に不自由であったのか、という点だ。自由な生活を送る僕だから理解できなかったのかとも考えたが、現代社会も法や規律などの制約に縛られた、不自由な生活とする事もできる。「自由」とは何か。「不自由」とは何か。恐らく僕が男の行動に納得できなかったのは、自由と不自由の選択、判断に迷いや不安があったためであろう。今までの自分の選択は正しかったのだろうか、と考えさせられたが、正解は分からないし、不自由ではないと言い切れる生活を送る僕は幸せなのだろうと思う。

読み終えて感じた事がもう一つある。それは、表現力の高さである。説明力の高さ、比喩の多さ、上手さ、余韻の持たせ方等、読み易さもあり、情景の

『阿Q正伝』を読んで

これは、中国のある小さな村に住んでいる本名すらはっきりしない、日雇いの仕事をして、何とか毎日を食い繋いでいる阿Qという主人公の男が金も女も地位もないけれど、人一倍高い自尊心で自分に起こった負の出来事を良い風に心の中で変換して「勝

の方法ではないと私は思っています。

この方法は現代でいう覚せい剤や麻薬のようなものですぐに依存してしまい、やがて自分の首を絞めてしまうことになるでしょう。

これからは“いま”を見直して“自分の脚を自分で食べてしまっていないか”を確認することも大切だと思いました。

3年物質工学科 豊永 和希

想像も容易であった。そのせいもあり、喉の渇きまで読み手に伝わって来る。特にすごいと感じたのは砂の見せ方である。砂には様々な性質があるが、そのほとんどが利用されており、身近である砂をここまで恐ろしく、嫌な物に見せることができるのかと感心した。口や目に砂が入った時のざらつく不快感までも細かく表現されており、まるで自分が体験した様に錯覚する程であった。

砂の性質として、特に「流動性」がよく用いられている。男が魅せられたのはこの流動性であり、穴の中の男を追いつめるのも流動性であった。そもそも男が砂に魅せられたのは、「定着」に固執した人生を嫌い、流動性を好んだからであった。しかし強い生活は日々同じサイクルで過ごす女との定着した生活。だが男は砂が流動するように環境に適応し生活を送る。このように、表現としても砂の性質を利用しているのではと考える。

また、砂の穴を世界ととらえることもできる。生活をし、生きるために働く。本質は違えど、行いは現代社会と変わらない。深読みしている点も多いかもしれないが、砂という物一つでここまで表現の幅を広げられるのはすごい技術だと思った。

この作品を通じて、思う事も、考え直させられる事も多くあったが、自由とは、という価値観について学んだ事が一番多いだろうと感じる。一見不自由であっても、そこに目標や生きがいを感じれるかどうかで見方は変わってくる。不自由こそ感じてはいないが、趣味や夢などは持ち、前向きに生きようと思った。

3年建築学科 川崎 壮士郎

利した」と思い込むことでプライドを守ってゆく彼の日々を描いた物語である。結末を言ってしまうと彼はそのような支離滅裂な考え故に最後にはある出来事により銃殺されて死んでしまう。

彼は前述した通り、中国本土の中でも最も身分の

低い人間であるので仕事こそ真面目にやるし、仕事に関しての、そこそこの評判もあった男だが閑人(暇で下らない男たち)に不細工などと言われ、日雇い仲間ともしょっちゅう喧嘩をしていた。その喧嘩に負けるたびに都合よく「あの場面は、あーだったから実際は私の勝ちだ」という風に脳内変換を行って自分の勝ちだ、と言い聞かせていた。

私はふと考えた。自分にもこういうところがあるのではないかと。テストの結果が良い例である。自分の中では頑張っていたとしても稀に結果がついてこない事が多々ある。そのような場合、テスト問題の所為にして自分の努力不足に関しては一切反省せず勝ち誇った気分である事がよくある。これに似ているのではないかと僕は考えた。心が少し痛くなった。

ある日、阿Qはとある事情で、村八分になり仕事にもあぶれてしまって食に困り、挙句の果てに盗みを犯してしまう。その罪を隠すために点々と逃亡生活を送る内に、港で物議を醸している「革命党」が逃亡先の街に近くにやってくる。それを知った彼は意味も分からぬまま革命に便乗しそれについて騒いだ結果、趙家の略奪に関与した疑いで(本当は関わっていない)逮捕される。つまり無実の罪を着せられたのだ。そのまま「学」の無い彼は、意にそぐわない逮捕である事の弁明も出来ずにあっけなく銃殺されてしまう。

自分が原因で十分なお金ももらえず学習を提供される場面も与えられないということはとても惨いことである。阿Qのこのストーリーは現代社会の問題に直接結びつけられるのではないかと私は考える。まずここで上げられるのは阿Qの貧困の問題についてである。住んでいる地域、祖先の身分がそのまま受け継がれるのは現代社会の悪しき習慣だと私は考える。日本ではそのような事例は極めて少なくなったが世界を見渡してみると、まだそのような「悪しき習慣」が断ち切られてない地域もある。皆が健全に育ち貧困の差が生まれないようにするべきである。今回はこの「阿Q正伝」を読んで学ぶべき事がたくさん見つかった。

まずは根拠の無い自信、プライドは世界を生き抜く中であまり意味を持たないという事だ。ポジティブな心構えを持つことは良い事だろう。だがしかし何でも自分に勝機があると信じて、自分の本当の結果が見えなくなってしまっただけでは人間生活を送る上でかなりの支障をきたす。これでは本末転倒だ。何事も破滅の道を歩むことになる。

地域格差も勿論いけない。世界では様々な貧困問題が度々ニュースで取り上げられ、連日各国のメディアたちも報道しないわけにはいかない状況に陥っている。このような、どうしようもない世界の現状を私たちは解決するために日々思いやりを持って接しなければならない。

誰かが自分よりも劣っているところがあれば、す

ぐに差別化を図り身分をつけ格差を起こすようなことはもうやめにしないか。これが世界に格差をなくすための第一歩だと私は考える。実現すればどんなにか良い未来が訪れるであろうか。その日が来るまで一生懸命今を生きることが大切である。作者の魯迅は私にこう教えてくれたように思う。



今年度の活動と来年度の図書委員会について

学生図書委員長： 福島 聖

図書委員会では今年度、テーマ展示、ブックハンティング、オープンキャンパス、深山書評の活動を行いました。各クラスの図書委員の方には、上記の取り組みに加え図書委員会にも積極的に参加していただき、一年を通して充実した活動をすることができました。

初めは学生図書委員としての経験が浅い私に委員長が務まるのか不安でしたが、前年度委員長の後藤先輩や今年度副委員長の田中君、四年生図書委員の小楠さんと山田さんに協力していただきながら、一年間の任を全うすることができました。

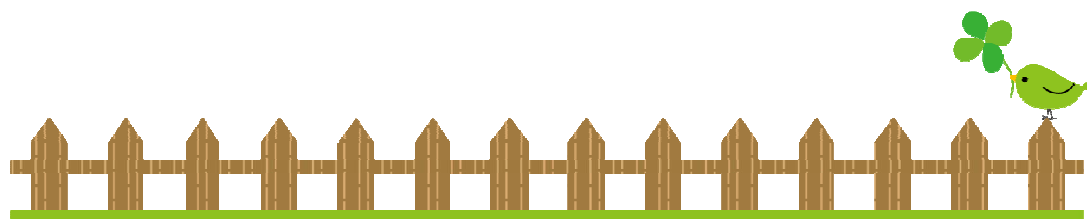
今年度から新しい取り組みとして、学生図書委員が中心となって図書館だよりの編集を行いました。より学生の皆さんが手に取りやすいような図書館だよりを目指し、様々な工夫を凝らしました。今まで図書館にあまり関心なかった方が、図書館に少しでも興味を持っていただけたら幸いです。

来年度本校図書館は改修工事を予定していて、より学生及び地域の方々が利用しやすい施設に生まれ変わります。これまで図書館をあまり利用しなかった方も、是非来年度新しくなる図書館へお越しください。図書委員一同お待ちしております！

副委員長： 田中恒成

今年度も昨年度に引き続き、図書館を多くの人に利用してもらえるように、テーマ展示、ブックハンティング、深山書評など、様々な企画を実施しました。私は深山書評の選考にかかわったのですが、今年度も力作ぞろいで、かなりの時間をかけて応募作を読み込んだことを覚えています。

また、今までの委員会の活動を引き継ぐだけでなく、今年度からの新たな取り組みとして、図書館だよりの編集を図書委員自ら行いました。気に入っていただけたら嬉しいです。





「第六回深山書評」受賞発表<2019年1月24日発表>



第六回深山書評にはたくさんの応募が寄せられました。5名の審査員（図書館長および4名の学生図書委員）で選考した結果、下記の通り受賞作が決定いたしましたので発表いたします。

賞名	クラス	氏名	書評タイトル『書名』 著者名	請求記号
図書館長賞	3E	児玉 聖	終わりの始まり『三日間の幸福』 三秋 継	913.6/ミキ
深山賞	2C	中坂 元	果たして殺人は容易なのか 『殺人は容易だ』 アガサ・クリスティー	933/Chr/S2716
優秀賞 (3名)	5C	後藤 光貴	『青くて痛くて脆い』を読んで 『青くて痛くて脆い』 住野よる	913.6/スノ
	3E	野口 芹菜	宮沢賢治の父親の視点から 『銀河鉄道の父』 門井 慶喜	913.6/カド
	1E	川畑 歩美	『白旗の少女』を読んで 『白旗の少女』 比嘉 富子	289/ヒガ
優良賞 (4名)	3M	岩村 輝正	お金と信用 『新世界』 西野 亮廣	779.14/ニシ
	3A	清 詩桜梨	人付き合いの『参考書』 『やっかいな人に振り回されないための心理学』 齋藤 勇	361.4/サイト
	2M	久木野 隼人	漫画を愛する人々 『次回作にご期待下さい』 間乃みさき	913.6/トイ
	1A	前田 刻愛	この書籍を読んで 『一人っ子同盟』 重松 清	913.6/シゲ

☆審査員コメント☆

今年度の深山書評も数多くの投稿をいただき、ありがとうございます。今年度は小説だけでなく専門書や参考書のレビューもあり、1つ1つがそれぞれ個性的で、審査員として甲乙つけるのがもったいないと思う作品ばかりでした。

例年、レビューで紹介した書籍は注目を集めるため、興味を持った方は早めに借りていただくことをおすすめします。

今年度は賞品をリニューアルし、より豪華になりました。自分のお気に入りの本を紹介してみたい方は、是非来年度の深山書評に投稿してみてください。 学生図書委員長 福島 聖

☆表彰式☆

2019年1月30日（水）16:20より、図書館第一閲覧室で表彰式を開催いたしました。受賞者の皆さんおめでとうございます。

学生図書委員会



深山賞

果たして殺人は容易なのか？

2年物質工学科 中坂 元

書籍名：殺人は容易だ

作者名：アガサ・クリスティー

出版社：ハヤカワ・ミステリ文庫

推理小説というものは実におもしろい。読者の表の顔には表れない裏の顔を知っており、その人の心の奥底に潜む、刺激を求め続ける探求心の塊に火をつけ、読者を巧みにその世界に引き込んでいく。

このアガサ・クリスティーによる『殺人は容易だ』はその引き込む力が実に特殊だと感じる。同じ村で何人もの人々が次々と不可解な死を遂げていくという、よくありそうな展開に見えるが、アガサ・クリスティーならではの暗くミステリアスで、まるで深い霧の中にいるような雰囲気がその世界の不気味さを際立たせ、読者の心を

虜にする。本を開いて読み進め、気付いたときには読者は、もう完全にその世界に引き込まれ、読み終えるまで決して戻っては来られないだろう。ペイカー街の某探偵やもじゃもじゃ頭の某探偵でもない、元警察官ルークと手探りで謎解きが始まる。

複雑に絡み合った糸も結局は一本の糸でしかない、分かってしまえばどうということはない世界。しかしそこにはアガサ・クリスティーの巧みなトリックが仕掛けられている。

心の奥底の探求心がくすぶり続け、日々何か物足りない人、「殺人は容易だ」と確信をもって言い切れる自信か、「残念だったな、トリックだよ」と言われてスカッとした人にこそオススメの一冊。いずれにせよ本を読み終えて閉じた時にきっと呟くだろう。「殺人は容易だ」と。

図書館長賞

終わりの始まり

3年電気情報工学科 児玉 聖

書籍名：三日間の幸福

作者名：三秋縊

出版社：メディアワークス文庫

さて、皆さんは自分の寿命に“査定価格”がつけられるとしたらどれくらいになると思うだろうか。残りの人生に、命に値(ね)をつけるのだ。それはとてつもなく大きな額になるに違いない。

だがこれは、一年につきたった一万円でしか寿命を買い取ってもらえなかった青年の話。残りの人生何一つ良いことがないが為に付けられた最低の値段。未来に何の希望も持てなくなった主人公は寿命の大半を売り払ってしまう。僅かな余生で徳を積み、少しでも幸せ

になろうと躍起になるも空回りするばかり。そんな彼を「監視員」のミヤギは冷めた目で見ていた。寿命が短くなったものが自暴自棄になり問題を起こさぬよう監視する存在、監視員。何故、少女ミヤギはこのような若さで監視員などという仕事をしているのか。その理由を知った主人公は、残り少ない人生の全てを彼女のために使うと心に決める。

残された寿命は二ヶ月。主人公がミヤギの為に起こした行動。主人公を強く突き動かした、ミヤギが監視員となった理由。そしてタイトルの「三日間」とは何か。その答えを是非ともこの本を手にとって確かめていただきたい。

ここに、だれもが想像し得ないであろう最高の結末を約束しよう。

優 秀 賞

『青くて痛くて脆い』を読んで

5年物質工学科 後藤 光貴

書籍名：青くて痛くて脆い
作者名：住野よる
出版社：KADOKAWA

あらゆる自分の行動には相手を不快にさせてしまう可能性がある。これを踏まえて最善な人との付き合い方はなんだろう。きっと誰もが一度は悩んだことがあると思う。

大学一年生の田端楓は、その問いに対する答えとして「人に不用意に近づきすぎないこと」、「誰かの意見に反する意見をできるだけ口に出さないこと」を心掛けていた。しかし、そんな楓に反するように秋好寿乃は快活だった。秋好に流されるがまま、二人は一年次に「なりたいたい自分になる」をテーマにサークル「モアイ」を結成した。崇高な理想を掲げたモアイだったが、四年次には就

活ごっこサークルに成り下がっていた。そんなモアイに絶望した楓は現状を否定し、モアイのリーダー秋好を否定することで、いつかの高尚な理想を取り戻そうとした。かつて理想を謳っていた、畏敬の念を抱いていた秋好に戻ってきてもらうために。

読後は住野よる作品特有の穏やかな気持ちになれたが、読んでいる途中は一人一人の言動が青くて痛く、大学生の信念は脆いものだと思った。四年次の楓が秋好と話し合うことなく、否定という矯正手段をとったことが大学生らしくて共感を覚えた。思っていること自体は単純なのに、素直に相手に意向を伝えられず、回りくどい手段に出ることは誰しもあるだろう。当時は無自覚だったが、振り返ればそうだったと思う経験もある。青くて痛くて脆い思い出を再び咀嚼した一冊だった。

宮沢賢治の父親の視点から

3年電気情報工学科 野口 芹菜

書籍名：銀河鉄道の父
作者名：門井 慶喜
出版社：講談社

「銀河鉄道の父」私は題名に惹かれてこの本を手に取りました。結論から言うと、この本はタイトル負けをしておらず、題名の効いた内容になっていると思いました。1ページ1ページをめくるのが楽しいと感じるほどに…。初め題名を見たときは、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」をアレンジした作品だと思っていました。しかし、宮沢賢治は宮沢賢治でも、父の政次郎の視点から書かれている新しいタイプの物語でした。賢治に関する文献は読み

切れないほどありますが、賢治ファンでもまず知らず、存在を知っているのは賢治の研究者くらいと言われる政次郎に関してのお話は1冊もなかったもので、今までとは違った切り口から広がる世界に一気に引き込まれました。質屋を営んでいて地元の名士であった宮沢家で過ごした賢治の幼少期、最愛の妹トシの闘病と死、物書きとして過ごした余生。これらのストーリーが、短い文章で全てがわかるような口調で語られており、そこから滲み出る不器用な父親の息子に対する愛がとても心地よかったです。直木賞も受賞し、今まで知っていた文筆家宮沢賢治の違った一面を知る事が出来る「銀河鉄道の父」ぜひ読んでみてください。

『白旗の少女』を読んで

1年電気情報工学科 川畑 歩美

書籍名：白旗の少女
作者名：比嘉富子
出版社：講談社

この話は、著者である比嘉富子さん自身の体験を記したものです。太平洋戦争末期、わずか7歳であった富子さんの今の時代では想像もつかないような凄絶な体験は思

わず泣きそうになってしまうようなものでした。

幼いころの記憶であるはずなのにこんなにも鮮明に覚えているというのだと思うと、悲しくなるものでした。慕っていたニイニイが自分の横で亡くなった描写は恐ろしいほど詳しく書かれており、挿絵の効果も相まって戦争とは、人の死とはこんなにも悲惨なものなのかと思うほどでした。

後半は、体の不自由な老夫婦との話を中心でした。心

も体も休める時などなかった富子さんにとってはとても大切なものだったのだろうな、と思いました。その老夫婦との別れは、子どもであってももう二度と会えないんだと察してしまった富子さんの心の声がひどく印象的で

した。

小、中学生向きかと思っていましたが、高校生である私でも満足でき、かつ、戦争の悲惨さ、平和とは、といったことをあらためて考えさせられるものでした。

お金と信用

3年機械工学科 岩村 輝正

書籍名：新世界

作者名：西野 亮廣

出版社：KADOKAWA

お金とは何か、僕はこの本を読むまでお金について深く分かっているようで全く理解していませんでした。この本によって深く話を掘り下げられました。

お金と聞いてほとんどの人が、「汚い話だ」、「いやらしい」と思うかもしれませんが。僕もはじめお金の話をするなんて、と何ともありきたりな気持ちでした。しかし読み進めると、作者はこう言っています。

「君に守りたいものがあるなら、お金の話から逃げる

な。」

現実的な話をするならばどんな話でもお金の話は消えることはありません。きれいごとだけでは世の中は回っていません。そんな風に感じました。実際、お金はどうやっても何かをしようとするとなかなかかかってしまいます。そんなとき、信用という言葉が出てきます。作者が言うには、「信用を売れば、お金がなくてもやっていける」と言うのです。それが良く参考になる生き方なのかは疑問に思うところですが、面白い生き方だと思いました。

信用による取引はまた新しい産業を生み出しそうだなと思いました。

優良賞

人付き合いの『参考書』

3年建築学科 清 詩桜梨

書籍名：やっかいな人に振り回されないための心理学

作者名：齋藤 勇

出版社：宝島社

あなたの周りには、付き合っていて「面倒くさい」「厄介」「変」だと思ってしまう人はいますか？また、そう感じてしまう迷惑な人たちに振り回されて困っていませんか？人間関係で、悩みを抱えている人にこそ、この本をお勧めします。

この本は、心理学の視点から厄介な人への対処法を教えてくれる『参考書』といえるものです。様々なシチュエーションをイラストと2ページから4ページにかけて

の解説と、心理学のポイントで紹介しています。シチュエーションは大きく職場、友人、異性、身内、取引先の5つに分かれています。もしかすると、その中にあなたが悩んでいるタイプの人に当てはまる対処法が見つかるかもしれません。また、それぞれの対処法が見つかるかもしれません。また、それぞれの対処法には、心理学における現象が書いてあるので、新しい一面が見えてくるかもしれません。

ただし、心理学による対処法の本だからと言って、あまり頼り過ぎることがないようにして下さい。あくまで、『参考書』であるということを忘れないでいただくと幸いです。

漫画を愛する人々

2年機械工学科 久木野 隼人

書籍名：次回作にご期待下さい

作者名：間乃 みさき

出版社：株式会社 KADOKAWA

私たちが普段何気なく読んでいる漫画には、最終回以

外に打ち切りという名の終わり方があります。漫画の終わりなんて長い歴史の中ではごくごく小さな出来事で、どういう形であれ終わりはありません。しかしこの本では、終わらない漫画家を目指し面白い漫画を作り求める編集者と漫画家が描かれています。

この本は間乃みさきさんのデビュー作で、第3回角川

文庫キャラクター小説大賞で大賞を受賞しています。テンポが良くわかりやすい展開なので、すらすら読むことができる作品だといえます。この本の主人公の眞坂崇は月刊漫画誌の若き編集長で、落とし物のせいで遅刻をしたり、手を焼くほど困った人を放っておけないお人好し。もう一人の主人公の蒔田了は、眞坂の同期で「面白い」を生み出すことにし

か興味がなく、そのためなら一切の躊躇をしないという物が無い破天荒な天才変人編集者です。全くといっていいほど異なる性格の二人に共通していることは、バカがつくほど漫画が大好きだということです。そんな二人が苦闘しながらも一生懸命に、「次回作にご期待ください」という一文に隠された思いを解き明かすお仕事小説です。

この書籍を読んで

建築学科1年 前田 刻愛

書籍名：一人っ子同盟
作者名：重松 清
出版社：新潮文庫

この物語に出てくる主人公の信夫君と、公子ちゃんと嘘つきで年下のオサム君の三人って、特別に仲が良く楽しいという感じではないが、困ったときは三人の小学生が周りには言えない事情があるけど、それでも助けて協力し合う感じで、クラスの子たちの友達グループや集団の空気とはちょっと異なるある意味題名通りのグループだなと思った。

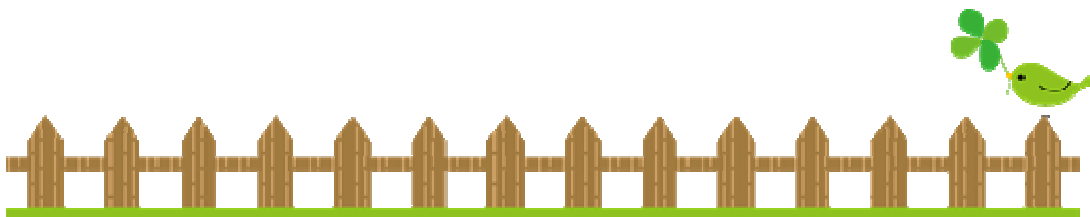
私は、一人っ子同盟を結んでいることで何かと繋がっている公子ちゃんと信夫君の二人の成長を助け、懸け橋になっていた人は実はオサム君ではないかと感じた。

クラスの子たちは口をそろえて一人っ子はわがままだ、だの意気地なしだ、だのと唱えているけれど周りか思い付きや偏見で何かを言動することでこの二人は

正直居づらかったり、理不尽にも苛立ちがつのって、挙句には呆れたりしていた。

そんな二人はオサム君に苛立ちを感じたり、正直面崩れのように映っていたかもしれないが、同時にオサム君は二人に、笑顔と裏事情の真実から理解した言葉の重みをくれた。特に後者は、物語の二人が成長したならオサム君の言動の意味が分かるだろうし、成長や考え方に影響していたのだと理解するのだろうなと思った。

現状には、当たり前だけどいろいろな人がいる。真実があれば嘘もあり、昔があるから今がある。きれいごとかもしれないが、昔の記憶は時間の経過で薄れていくものだ。だからこそ、今からでいい。本気で人生を楽しみなさい。どの時間軸をとっても後悔しないように。



図書館開館予定について

★今年度の夜間開館は、平成31年2月20日(水)までです。
(なお、平成31年度の夜間開館は、4月4日(木)の開始予定です。)

★次の期間は、平日のみ開館します。(土・日・祝日は閉館)
期 間：平成31年2月21日(木)～4月3日(水)
開館時間：9時から17時まで

学年末・春季休業中の長期貸出について

通常10日間の貸出期間を学年末並びに春季休業中は、長期貸出とします。
貸出開始日：平成31年2月12日(火)
返 却 日：平成31年4月5日(金)
貸 出 冊数：一人7冊まで

編/集/後/記

図書館だよりNo.84をお届けいたします。

今回の図書館だよりには、図書館長の笹谷先生、本年度をもって退職される山中先生、増井先生、森先生から玉稿をお寄せいただきました。ご多忙中のところご協力いただき、先生方にはこの場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

編集期間がテスト期間と重なってしまい、約1週間大急ぎで編集したため、至らない点多々あるかもしれませんが、1人でも多くの学生が図書館だよりを楽しく読んでいただけるよう精いっぱい頑張りました。

本誌では、校内読書感想文コンクール受賞作品と深山書評入選作品を紹介しています。興味がある本を見つけられた方は、是非図書館にお越しください。

図書委員長としての1年は本当に貴重な経験となりました。今年度図書委員会での活動を行うにあたり、サポートしてくださった各クラスの図書委員、図書館司書の方々にも、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

来年度図書館はリニューアルし、より学生・地域の皆様が利用しやすい施設になります。新しくなる図書館で、勉強や読書に励んでください。スタッフ一同お待ちしております！

4年機械工学科 福島 聖

